新編金瓶梅七集 上

馬琴作

豐國画

へ 13
3724
7

新 へ13
號 3724
巻 7

新編金瓶梅第七集上帙

馬琴編
國貞畫

江戸芝神明前三島町
書肆和泉屋市兵衛刊

夫忠恕にして物を憐ミ。辭讓にして驕らず誇らず。是を稱て善人といふ。善人の德行は必しも誌しべし。誌しは則外あらず。人に善を勸ん為なり。又殘忍にして慾と恣にし。奸佞にして人を害ふ。是を箴めて惡人とす。惡人は其を逃るに堪ず。其をしも筆に載するよりは人の惡を懲さんとて。其善を見ず惡を殫るを。新編金瓶梅といふ。年々に編ミ。歲々に鐫る。剞劂氏の小刀子の塵積て第七集も八の巻なる糸口をとくコヒアかに五萬歲と祝ふ。新板物の本作者は古稀に又四の緒の琵琶の湖それならで硯の海の淺ならぬ。趣向を今ハ茲も御覽じろ。尚若いでハ今りませぬ歟と正辯空言扱ませて。皆是腹の稿の。話說を画にかく。合巻に自序す。

天保十一年庚子春正月吉日　半瞎道人馬琴編

直木直平
由善
春蟲第壹
とまやもあへぞ
おろみじ
かし
花ヤ
蝶
西門屋
伴當
伴八

夏蟲第貳
子ゝあまれ
親学せぬ
螢哉
北利妻
媒鳥
西門屋
白市

夏蟲第二

阪を照る土山ハ
さぞ蟬あぐれ

寒八妻
阿冷

西門屋伴當
旅助

秋蟲第四

機織や馬追虫と
星乃床

歌妓措塩

夢野屋
鹿吉

秋蟲第五
虫吟やかゝる
葬
客
文
陸水
女僧

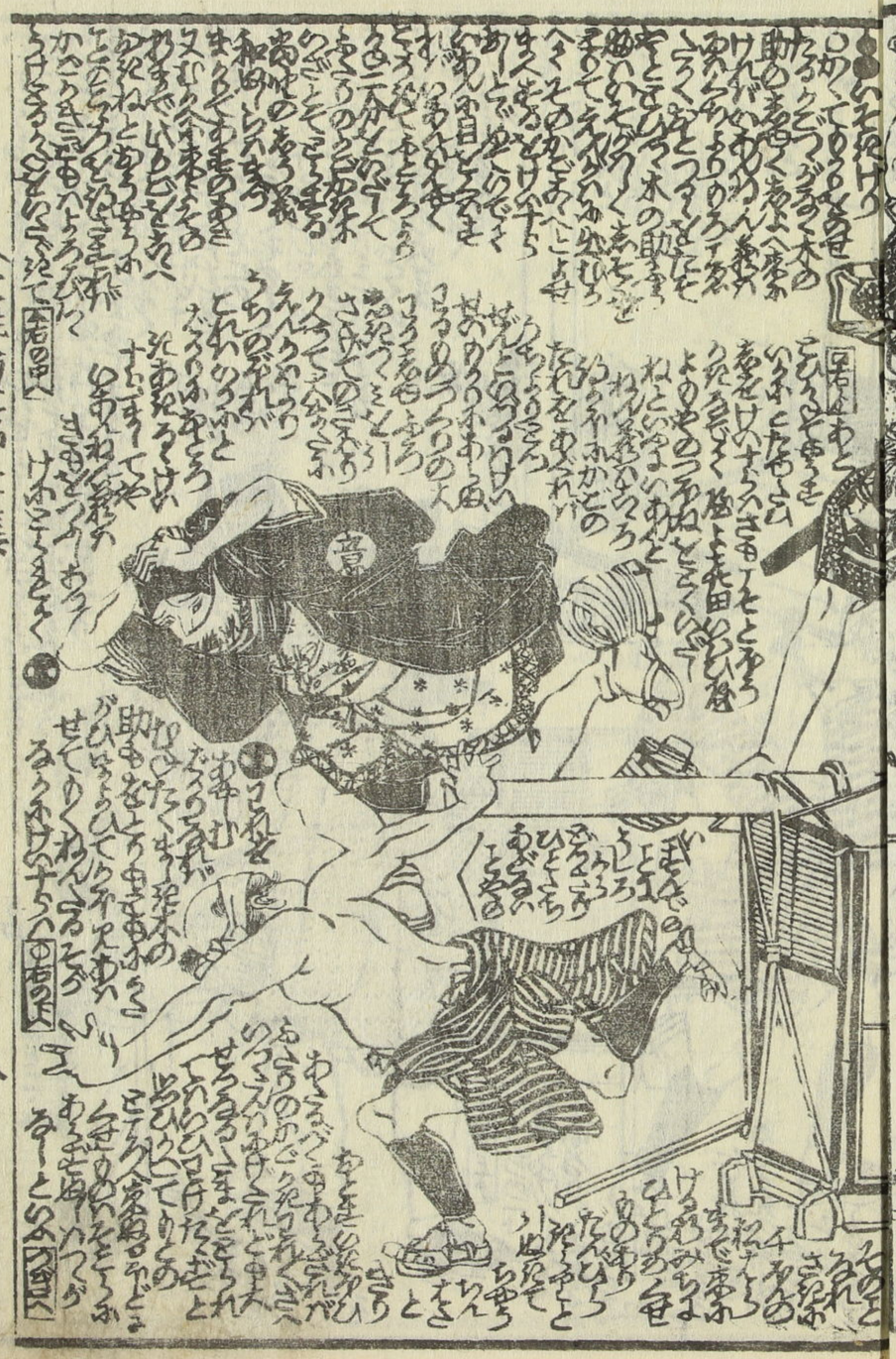
冬蟲第六
北越積雪の中に生出る蟲あり其形蚊より小くて蚊に
異し土人呼て雪虫と云雅客名つけて雪蛙
とも唐山に所云峨眉山
雪蛆の類
朝見雪乃蛆
牧之
鳴村
彈正
貴則

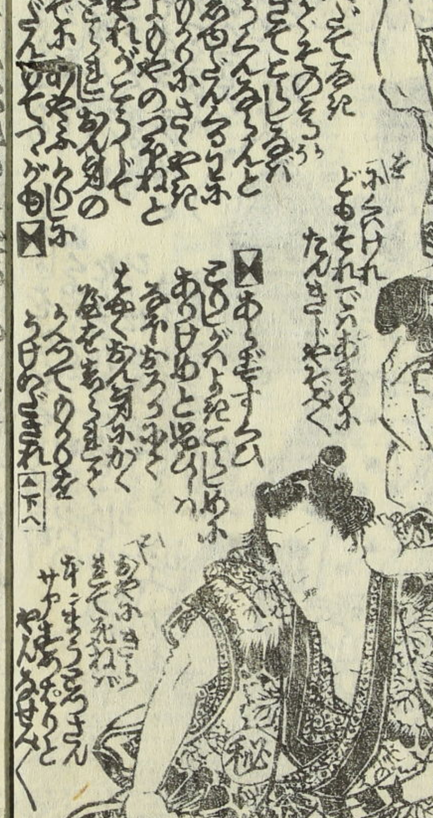
つぎ　さてけのぐてつれ
まこれりそのなこと
よさまそびでもい
そそめよものやの
めりけふもりい
なぬこれをとこ
あらざやとこそ
んそのあようり
よりびでそをる
さーもぶてその
木の助も
きもそうべ
そうせえ
それよりて
又せんそべありとあの
あろるあひとさて
けいすらいひとりさがあ
ける○あろほふたのさん
さろのせいりゃうまずの
ゆそてころをとこと
そもふやのおお姫ーろむ
とりふとたづぬるふと
京の大あ死人ものの屋の
るゆてあろ吉とよびる
ののんをそるいみや

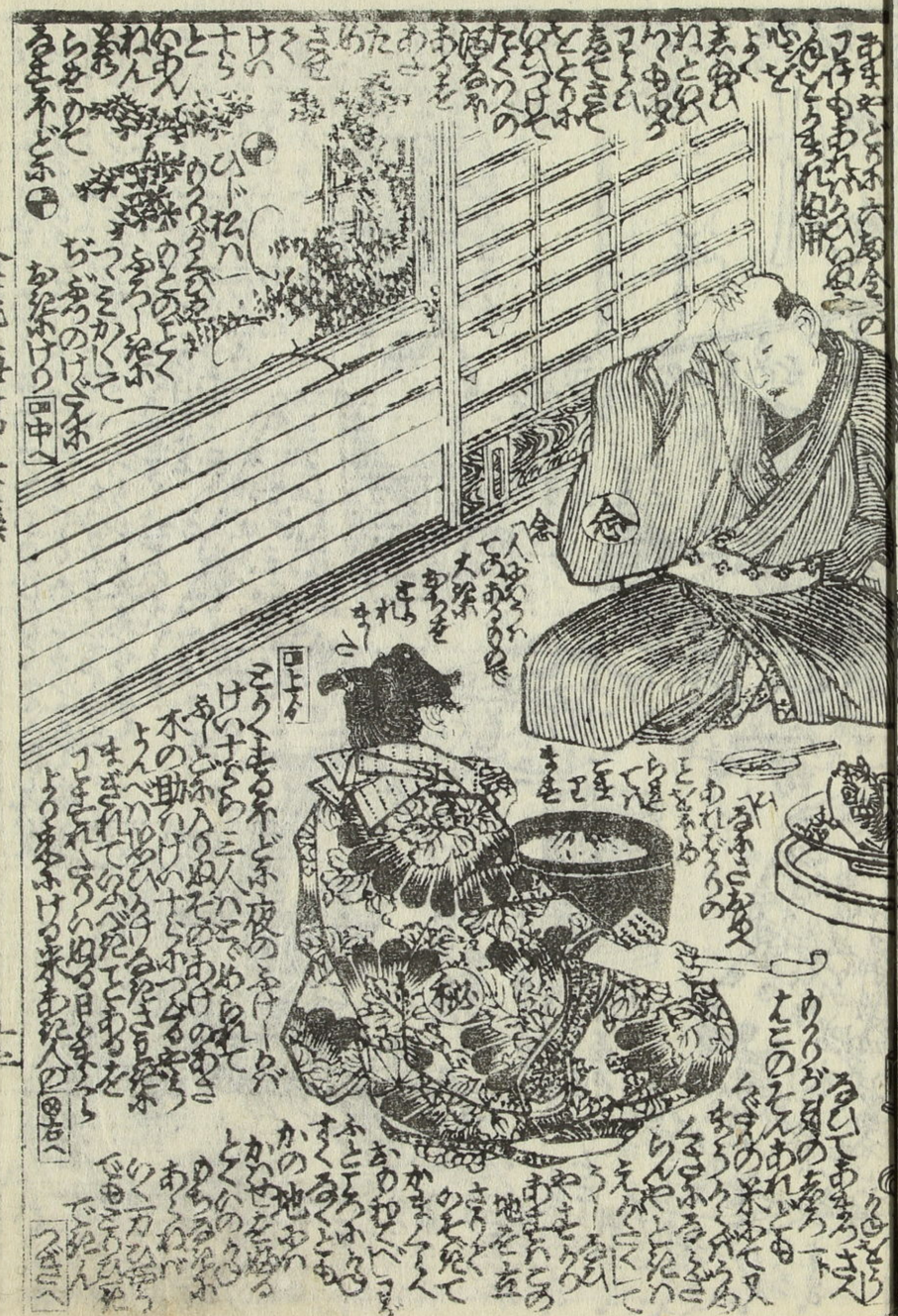
ハテひとりくの家あいせさへへ

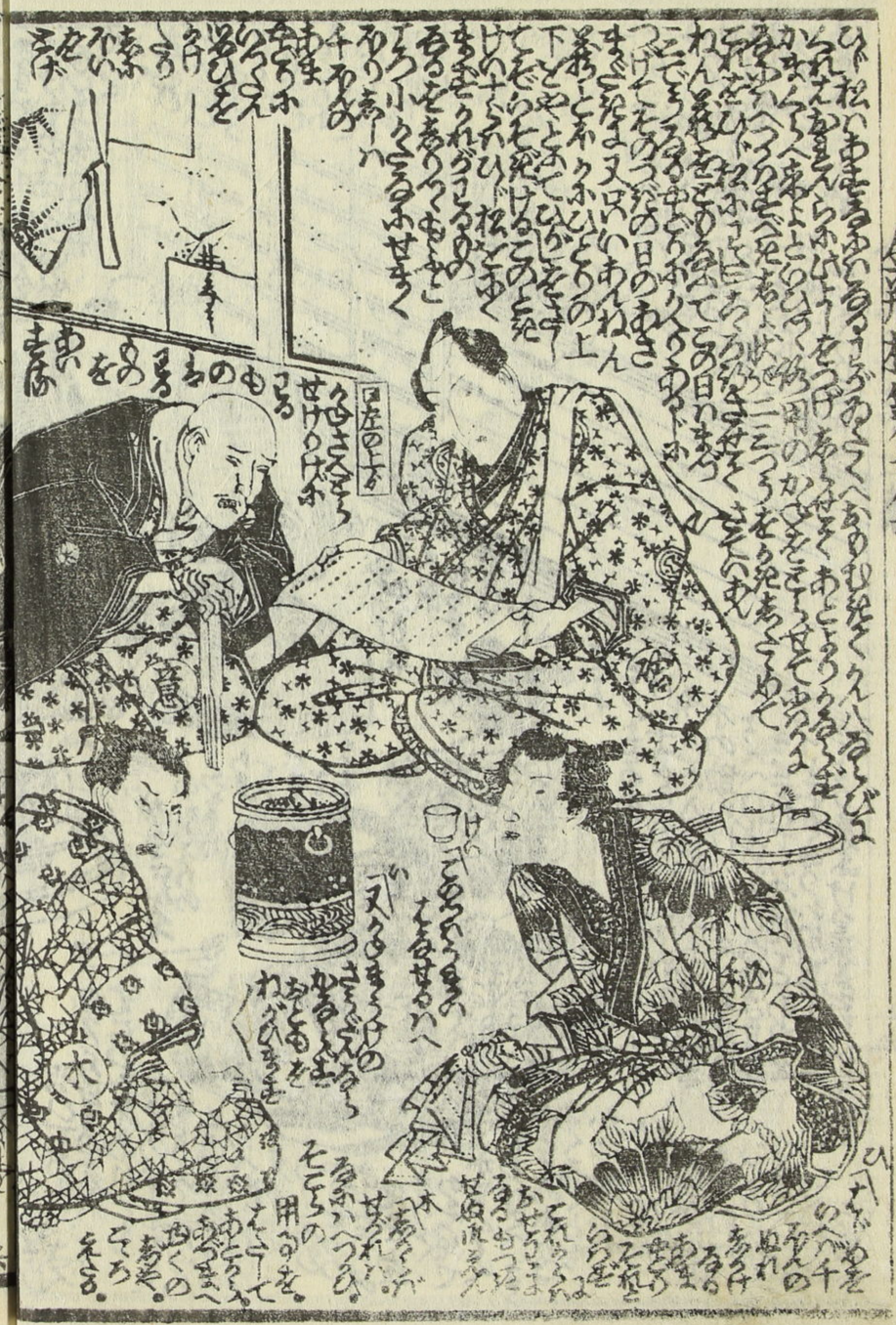
美人之ころ死のの

左のよのちふそそ人いありけ
その尚ふいこのるをろりさる
ものろりけり○あいさておお
いあれくおけけいすらごいでく
あてのちりりをろごふうちのせそ
木の助のまあくまよへのろんとそ
るよりろろのうたのけいせの
らいろごうをーむりんでのさろう死
そのろうとのでけろうそやう酔く
ろうとのでけろうそのようろのころうり
けれごあろりふろごとつそぜせて千ごのふ
まろたろうとよぶるやどまむろふ
ひとろのくやりのありやこふ
さうめくやんなのいるづま
ちやうちんてことりあと
せばいあれねそあろうごかた
らいあるやとなろうさけ
びものあんぜかごをござ
ととろちまそそくまろ
あくろうをあげよ
けるまたでゆてのんれ
ねえあろいあんとごとと
ともおあんとごとそ
ともふわげさる
かごうをりろ
とあくろくうごて
らかやうろごあてまのる

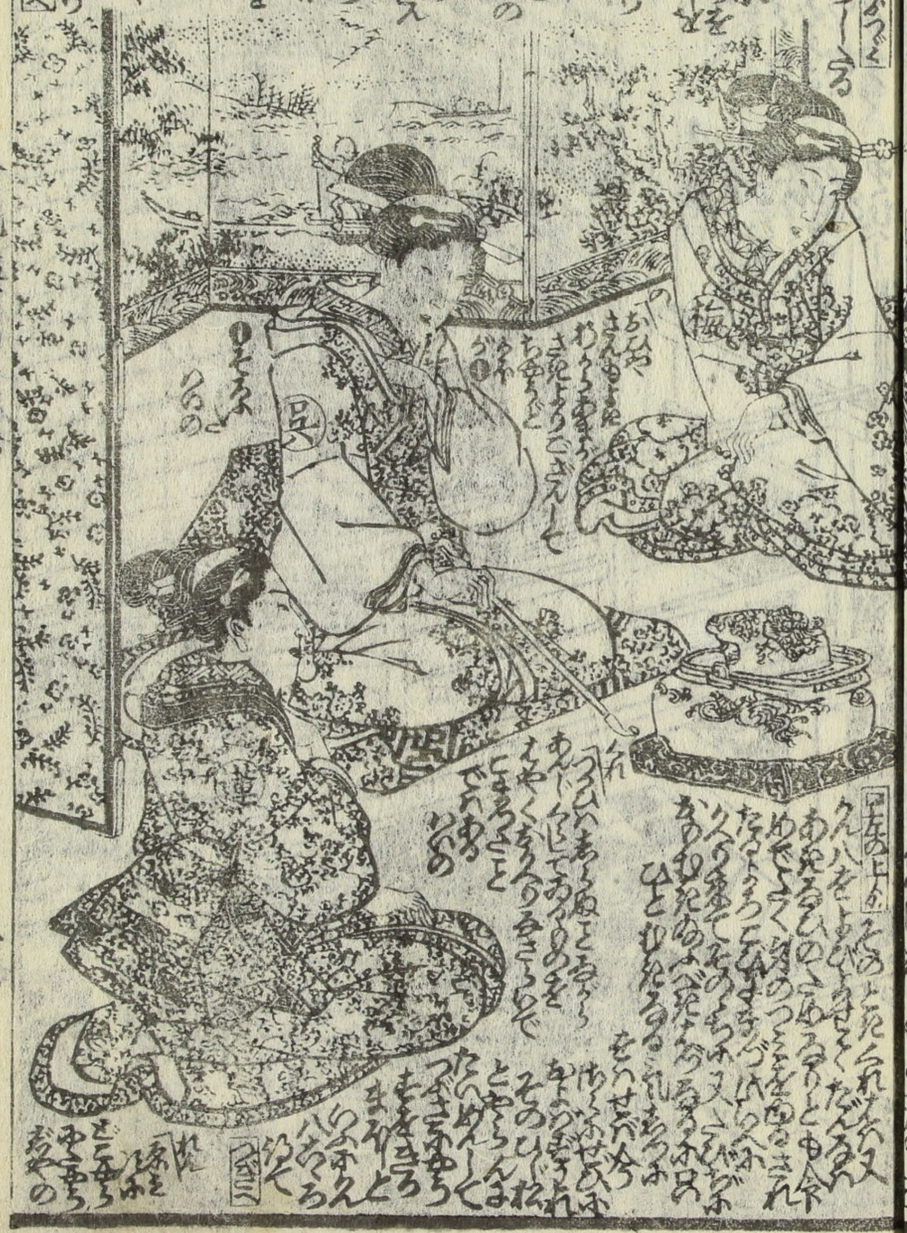


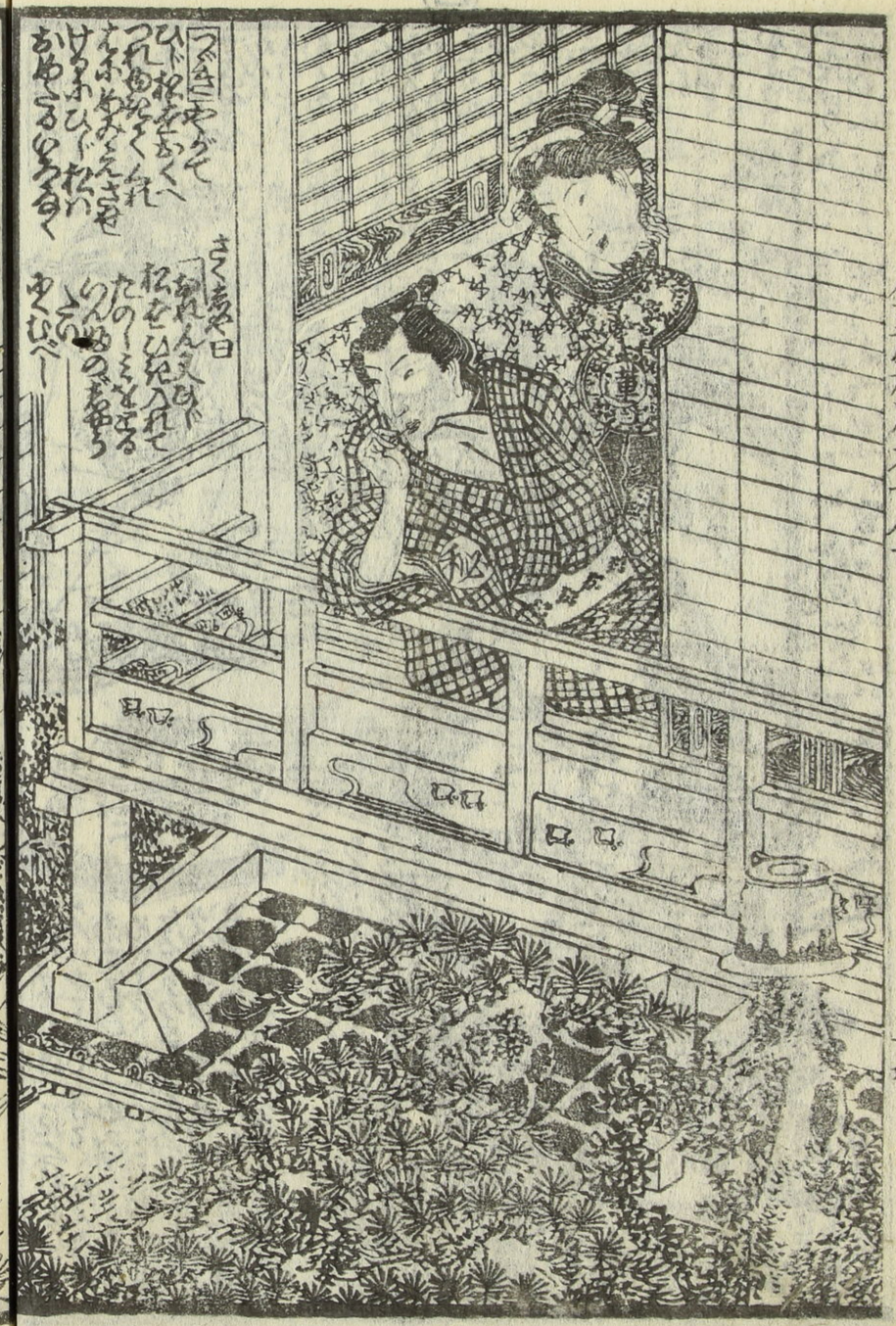






寒
冷
秘


福
鬼



つぎ
やがて
ひじ松をおくへ
つれ曲をくんれ
たにゆみえさせ
けるにひじ松は
おゆるいろなく
さて志や曰
「あれん又ひじ
松をひ絶入れて
たのしミをとる
いんぬのぞあらう
さい
ゆくむべー

まれるくまくにけい
十らぢかぐまうけの為の
とそ又うまくらへおりむ
紀しとのかりむ紀をうば
さふとてさへてやらがれも
亦あとよりしてかのちへ
まゐるたぶるれがあきは又
この男のいしまをのれ
るべーとそ曲くてを
いそぐをくれたへつらくと
うちゆくてたんるの あまにいひ
あとされーハ此ひじ松とも八を
あとよりかこせとあふるとと
さ紀にみやこのうぎこりひを思へば
このこびもなりとるしされがとひ紀
とども八を此ひじ松にとのるわせて
あらまへむくがつるさんとてゆれうに
とび紀をよびよせてそのすをこのきうが
とび紀にあくてゐ義せぎいそ紀て志曲く
志ようにさちうくるくまた母くこびちの
よういをしつくそのあけのあさとも八
ひじ松とのろともにかしまいちをせんと
するよひじ松はよんべよりぢび母うのろけ
かこりぬとそくひとあーもたこびゐ
ざれがとこのやくにさろべくも
あらぎられいかさぐさるる少年
ぜんるれがことひあらまへとのるに
ともまさうのおのたすけあれ
つぎへ
作者云
「このとろハあるくらのうちるるといさらかりむ紀をうくしりみるひとよろしくさらもべー
「この男女
うるうぎ
さわりのんく
あるべー今これを
アしゆくさ

蓮
帆

梅

時ぶんをはかりて志のびやかにおちくは妻がみまでおなぐらの血ちをぬぐひなどして夜あけてのちにらと耻らめぐるたくらをひそかにせどよりせかひいでゝうらぎのつまをむすびあれせぐ井戸のうちにぞ売づけゐ　かくてこのあけのあさ酒らどやのをとこともら水をくむとてそくぐんのるたくらを見いだしておどろきさはぐと大かたるぞやがてうあげてこれを見るにそのるたくらはそれらと耻らめゆくあわけれバくれぐ〳〵八らくぶれろおどろきあわてまぎてらんくれらハ由もひるがつけのかひもるくそひとげぐ〳〵なをらち上げてともに京しざるゆゑ

まいぞ かりでんろ

▲下へ　ふとりまでみちのかくらにでまさるひとりのわまありさび義をよびちろつけくとこれをけの十弟にさそせよとぞくまたるかそのくゝてかゞ世志をさぐけーかとび義にのぶかなるがらうけのでたゝてたわりまぞそたへやそてけいすらにあひつえてかやうくのとあとと

◆左の下へ　とぞおくろえまさく

◎左の上へ　そこのらされてたかぐくとちまくらんおやむかーかのさらだいかーゆゑのかの

▱堀もるかいかてとるらぶされがらちたらきのとせんまくるくらく　志ぞ

◎下へ

◎下へ　かまくらにさうやうち志ぬ倫ふどふるふれよりとび義とてと八がむらくはまけれがさるりちこれをも志やぐやくるあちとちと西られ記志らくひやくさらにあゆむくふどるとちぞふきろる
のけ田の志存くの

▲上の中へ

あらんぎらん　さぐれ日げめてとる　まだくんにあくら生づらを上どもえん八ひそかにさらひとくらぐん

諸あらくさいぞくそに　らそく　東初の入　御いく

のるたりくもをおのぞれぞれあよろまる何ぐてらへつかしても志びやれかやられけるねさんがさくあくらぐらわ白たたをとのてたれ人これぞゑくらいれかやておかさもさらとらいおのれぐともに耻らゆをあれまもつけの〇さるそどもけの十弟の木の助に

◎右の下へ

けや　かにとてみるやららのあわね

ハかけなくくまへまふらかまぜらく

▲右の中へ　つけてくらぐんのかまつてるゑつくきまにけのけらもらぶろてさるやらこそらんちや西に京ろてれおんわん義ともハらとともにこれをうちひらきくてるかわるそち

つぎへ

馬琴作

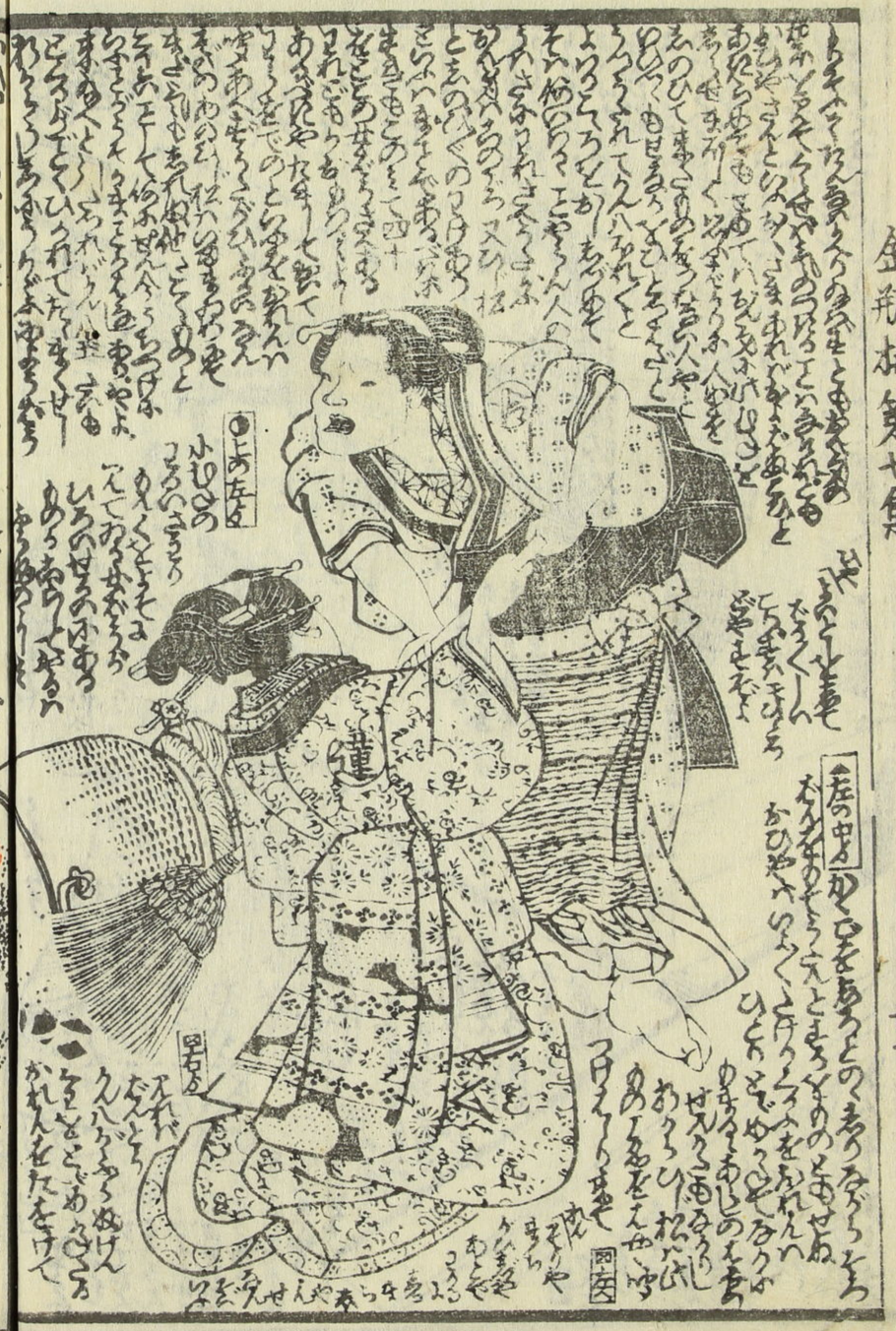
國貞画

家傳神女湯
精製奇應丸
熊胆黒丸子
婦人の死虫の妙薬
製薬本家
弘所 元版町中坂下南側四方の向
瀧澤氏

金匱救命丸
本御 林氏製
清書 谷 金川

寒

重



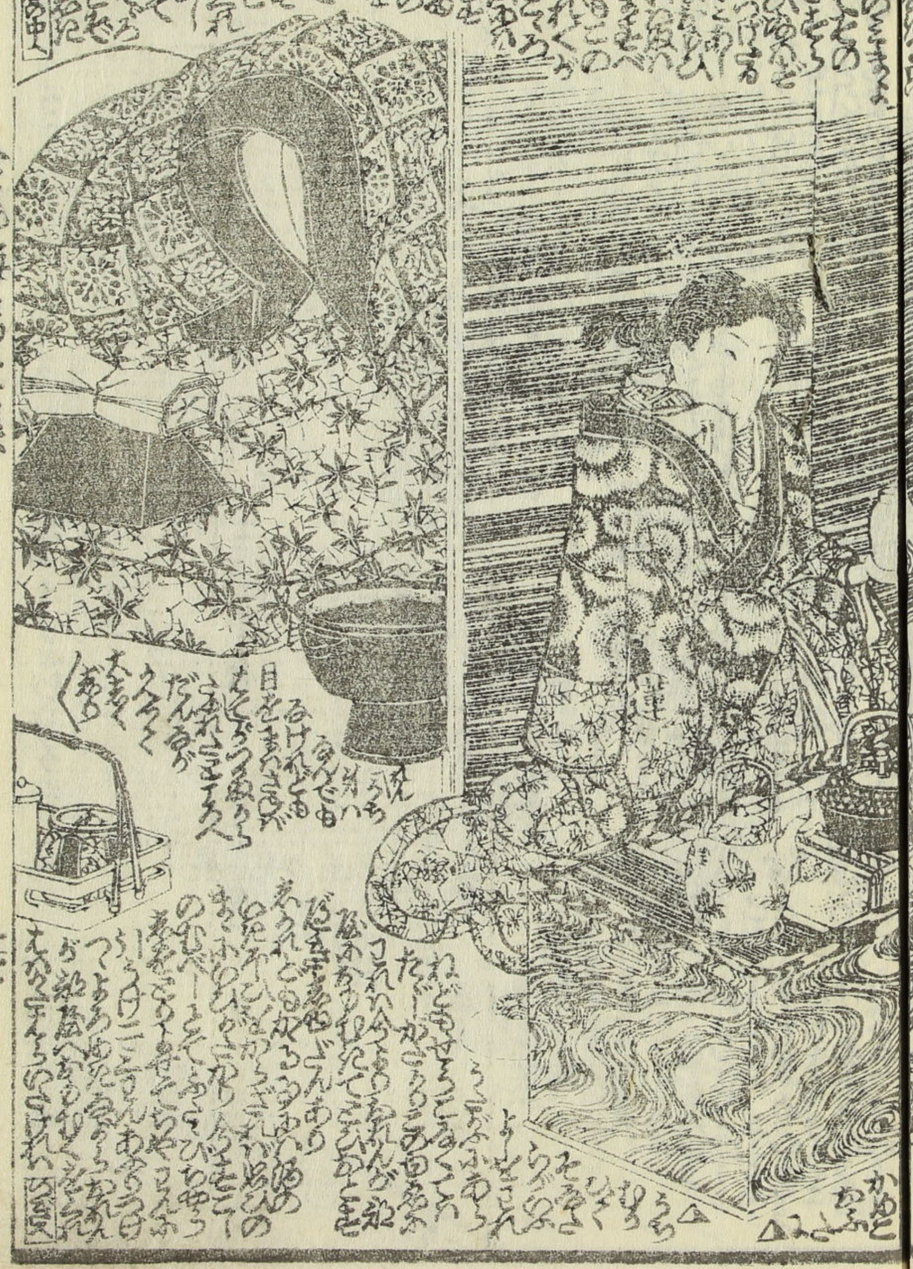
秘
寒

意
厄

呉
令
寒

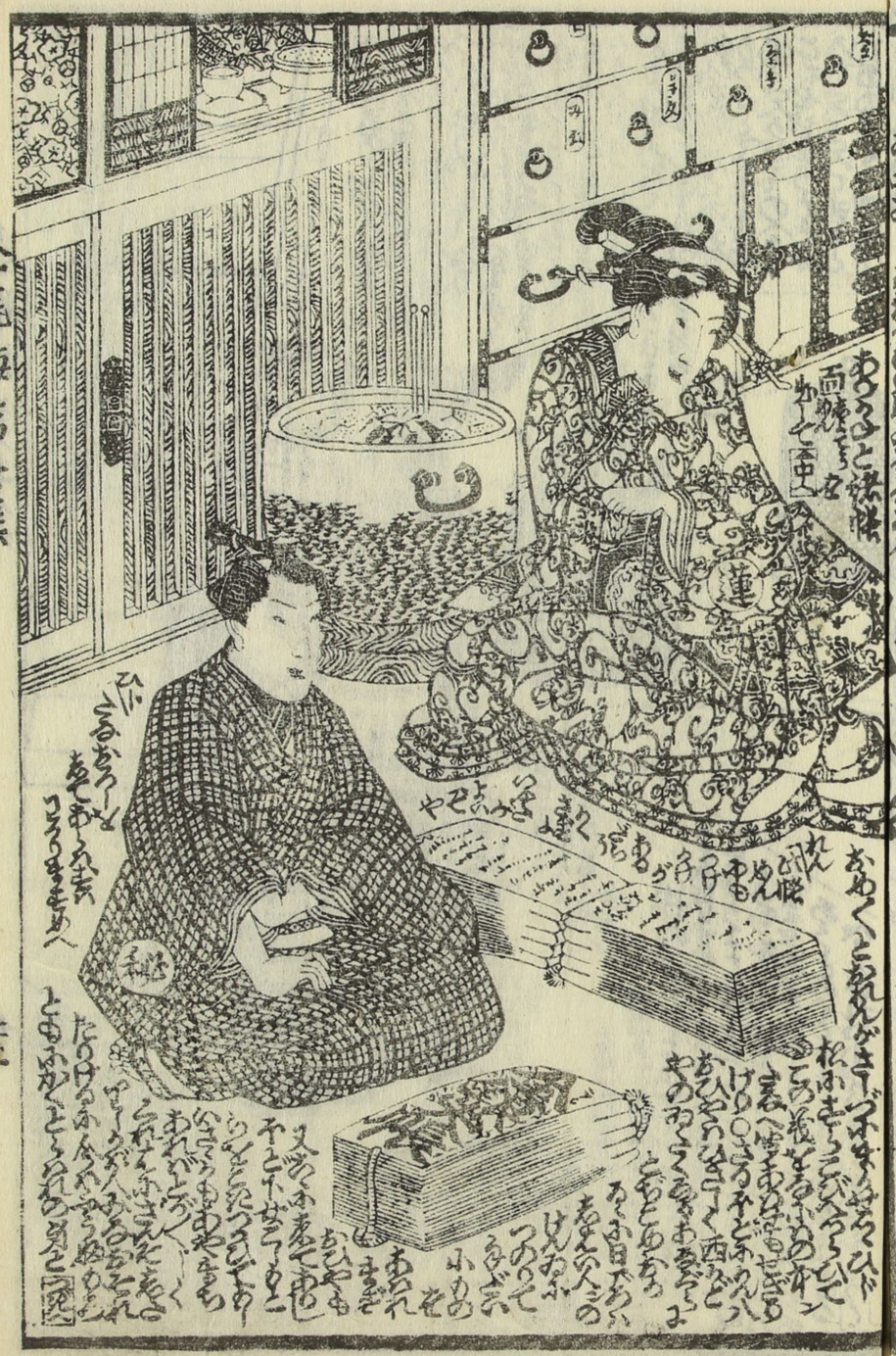
慎之慎之
出於海道
於海者也

伯虎



図左の上ゟ

図右の下ゟ



つゞき これよりさきの [illegible]

[illegible]

七の下へ

七のつゞき 大へんな [illegible]

[illegible]

百日まつて [illegible]

中の下へ

中のつゞき [illegible]

八の下へ

上の中のつゞき [illegible]

中の上へ [illegible]

十六の下へ

魏
呉
蜀

呉

弾

暖
寒

秘
蓮
冷

湖月百人一首操庫

源氏絵尽
女今川入

繪本名頭武者部類 前北斎筆 全

源氏絵尽 中本 全

蘭山先生著 女用玉絵

大本一冊

鶴賀新内正本所

和泉屋市兵衛